

境界に住まう者たちのために

——人間と〈人間未満の存在〉についての試論——

堀 江 郁 智

はじめに

2010年頃から、金森修先生は〈境界人間論〉という主題に取り組んでいた。〈境界人間論〉とは、一言で要約すれば「人間圏の境界領域を巡る一種の哲学・文化史」である¹⁾。実のところ、〈境界人間論〉は金森先生と私のつながりという点からしても、少なからぬ由縁を持っている。というのも、私が東京大学大学院・学際情報学府の修士課程に入学した2011年当時、金森先生は大学院ゼミでスティーヴンソン、ワイルド、ポー、江戸川乱歩らのゴシック作品を題材に〈境界人間論〉を展開しており、専門外ながら並々ならぬ興味を抱いたことがあったからだ。不本意ながら出席は叶わなかったため、ゼミの詳細は把握していない。だが、社会心理学を志していた当時の私が、金森先生の取り組んでいる内容にはじめて気持ちをそそられたのはおそらくこの時であった。

この試論では、以下の文献・論文を参照することで、金森先生の晩年の思索を特徴づける〈境界人間論〉の内実を明らかにしたい。

- (1) 『ゴーレムの生命論』(平凡社新書、2010年)
- (2) 『動物に魂はあるのか』(中公新書、2012年)
- (3) 『知識の政治学』(せりか書房、2015年)第9章「〈境界人間〉の不穏な肖像²⁾」
- (4) 『科学思想史の哲学』(岩波書店、2015年)第6章「〈理性〉という砦³⁾」

また、この作業を通じて、金森先生が〈境界人間論〉の立論構成によって現代社会に対していかなる問題を提起していたかを考察したい。

『ゴーレムの生命論』

——〈ゴーレムのなもの〉という形象

最初に、『ゴーレムの生命論』を手短に取り上げる。当書では、金森先生はユダヤ教のラビが造り出した

土人形である、ゴーレムという「人間のよ⁴⁾うな、人間にはなりきれ⁵⁾ていないよ⁶⁾うな〈人間未満の人間〉」(8頁、傍点原文)に着目する。〈ゴーレムの哲学〉を素描することに加え、〈人間未満の人間〉を考へることによって、一種の人間論を構築することが金森先生の狙いである。ゴーレム自体を集中して取り上げるというよりは、「〈ゴーレムのなもの〉なら積極的に取り上げ、そこにくすぶる〈ゴーレム性〉を抽出して、ゴーレム問題の圏域自体に広がり⁷⁾と多様性を与える」という意図によって書かれた当書は、例えばフランケンシュタインのクリーチャーといった伝説上の〈怪物〉からいわば現代的ゴーレムであるロボットまで様々な表象を取り上げる(12頁)。緻密な検討を通じて浮かび上がってくるのは、〈ゴーレムのなもの〉(一般に人間的ではない、亜人間的な成分)を見出す視線を他者に対してだけではなく、自身に対しても向けてしまう人間存在のありようである。それは、「私たち」にとっての他者(エスニシティやジェンダーのマイノリティなど)を〈人間圏〉の外部に弾き飛ばすという周辺化・差別化だけでなく、自国語を流暢に話す私が、慣れない外国語を口ごもりながら話す私を異物として見るという一種の自己分裂を象徴している。こうして、金森先生は〈人間圏の境界〉について語ることで、「むしろ境界は、〈周縁部〉にあるはずだという通念を破り、〈人間圏〉の内部をいわば彷徨して歩く」という事実を確認するのである(200-201頁)。

『〈境界人間〉の不穏な肖像』

——〈境界人間論〉の不可能性？

この問題意識は、2011年初出の「〈境界人間〉の不穏な肖像」に受け継がれ、大きく発展することになる。きわめて抽象度の高い当論文において、金森先生は新たな論点を付け加える。それは(1)人間は(時に病理にいたるまで)その自然なあり方から乖離し

つづける浮動的・不安定な存在であること、(2)〈人間圏〉の境界は同じく曖昧・流動的であり、ある時代・地域の〈言説編成〉によってその正当性が構築されること（例えば、アメリカの黒人はリンカーンの奴隷解放宣言までは市民権を持たない奴隷であった）である。

(1)に関しては、金森先生が〈反自然主義〉という立場に立っていることは特筆すべきである。それは、自然科学的知識によってあらゆる事象は説明可能であり、他領域の知識も自然科学的知識に近づいていくはずだという〈自然主義〉(naturalisme)を否定するものである。金森先生によれば、人間は〈生物圏〉からはみ出る存在であるが、かといって神や天にも到達できない「根無し草のような生物」なのである(197頁)。

したがって、(2)〈人間圏〉はその成立根拠を人間自体の行為・思考に求めざるを得ない。具体的には、(フーコー主義者らしく)法体系、行政制度、慣習や歴史認識、科学的知識の生産制度といった「〈言説編成〉の総体」が作動することで「〈人間圏〉の概要やその輪郭」は設定されると金森先生は述べる(198頁)。

加えて、金森先生は中心・境界の「差異化の契機」を〈ゴーレム因子〉と名付ける(208頁)。シーア派が支配する共同体でイスラム教を否定するような発言をする人間が、またたく間に境界付近に押しやられるのも、この因子の作動によって説明される。さらには脳死患者が問題になった時、その作動は残酷さを増し、「〈瀕死の同胞〉から〈医療資源〉に至るまでの連続的なスペクトル」に「処遇上の断絶を加える」のである(209-210頁)⁴⁾。

こうして確認されるのが、「〈人間の人間性〉は、絶えず社会的、政治的、文化的調整の対象として存在せざるを得ないという事実」であり、ひいては〈人間圏〉が超人、非人とみなした個人を〈ゴーレム化〉して、「より周辺地帯、より境界地帯へと押しやる」傾向にあるということである(210-211頁、傍点原文)。これを、金森先生は〈他者のゴーレム化〉と呼んでいる。要するに、そこには、サルトルの他者論のような一種の眼差しの相剋、相互の物化的な視線闘争が見て取れる。

他方で、金森先生はここでも自己のゴーレム化〉という、能動的自己が(ちょうど伝説のラビ、マハラルが自らの造り出したゴーレムを視る眼差しで)

〈劣化した自己〉を視ることで自己が裂開・分裂する事態に突き当たる。この事態によって明らかになるのは、〈人間圏〉の境界は絶えず浮動するだけでなく、「境界なるものは、いわば至る所に存在するということ」である(214頁)。それは言い換えれば、単に中心と境界が反転しうるだけでなく、中心の内部から何の前触れもなく境界が発生するということが、あちらこちらで起こりうるということである。この時、〈中心人間〉、〈境界人間〉という概念対はもはや双対的ではなく、限定的な妥当性しか持たなくなる。金森先生は〈境界人間〉という概念の自同性が崩れたいま、〈境界人間論〉は思想的に掘り下げることが困難で、「その不可能性の前で自ら麻痺した姿を晒さざるを得ない」とする(215頁)。それでは、〈境界人間論〉とは何を企図したものであり、その理論上の困難にもかかわらずいかなる効力を持つのか。

第三節では、その問いに対して回答が試みられる。金森先生は言う。〈境界人間論〉の立論構成はこの反論を半ば受容した上で行われている。というのも、自分の意図は例えば「差別撤廃運動などの運動論への直接的コミット」にはなく、また自分の関心も「差別撤廃のための理論装置の開発云々という作業」にはないからだ(216頁)。自分がしようとしているのは、〈境界人間論〉が「最終的に破綻するしないに拘わらず」、「人間が互いに持ちうる差異化設定的な眼差し、中心と辺縁との闘争的なやりとりなどに注目することで、人間理解に資する」ことである(217頁)。〈人間圏〉の影に対する合理的な制御の条件などを考えるのではなく、人間文化の清濁を併せ飲むことで、本来的に人文科学的なものでしかあり得ない人間のあり方の凝視という作業を遂行すること——その点にこそ、金森先生の関心はあったのである⁵⁾。

『動物に魂はあるのか』

——金森先生流のユマニズムの在り処

この人間のあり方の凝視という姿勢は、〈境界人間論〉が明示的に取り上げられることはなくなった金森先生のその後の仕事にも通奏低音として流れている。とくに『動物に魂はあるのか』は、「〈人間圏〉の周辺地帯に住まう存在への理論的関心に支えられている」という点で、『ゴーレムの生命論』と問題系の構想がほとんどそのままリンクしている(10頁)。

当書の目的は題にあるように、主に〈動物霊魂論〉

の立場から「動物のことを自然科学的様式以外の様式で語ることに」ある(11頁)。ただ、序章にも書かれているようにそれはあくまで迂回路であり、金森先生が考えたいのはここでも人間のことである。「動物論の背後にある人間論へ」——にもかかわらず、この言は人間中心主義的な立場の表明ではない(9頁)⁶⁾。例えば、金森先生はピーター・シンガーが健康なチンパンジーと、重症障害新生児の〈命の価値〉を比較して、前者を後者よりも重視するとした事件に言及する際も、「動物に優しい」ことが「人間に冷淡である」ことに簡単に裏返ってしまう人間存在の矛盾に目を向けているのである(212頁)。

また、金森先生が〈動物機械論〉に対して〈動物靈魂論〉を称揚するのも、たとえ私たちが完全には〈種差別主義〉からは脱却できないとしても、生命操作を肯定する〈現代化された動物機械論〉が前景化する時代状況のなかで、(あたかもデカルト派のマルブランシュに対するフォントネルの反応のように)その動きに抑制をかける「微温的で退嬰的な雰囲気」を身に纏うこと」をむしろ肯定しているからである(242頁)。金森先生は、あくまで人間の卓越性・高貴性を謳っているというより、客観的な知性を持つがゆえに動物を目的合理的に酷使し、虐待してきた人間の愚かさに注意を促しているのである。人間という非常に複雑な存在に対して、金森先生は愛情を持って、しかしながら「人間だけが特別である」という人間中心主義ではないかたちのユマニズムでもって接しているものと思われる⁷⁾。

そもそも、〈境界人間論〉を通過した金森先生流のユマニズムは、人間を独立的・自存的なものであるとは決して見なさない。その意味で、〈人間圏〉は「浮動性の嵐の中にある」(212頁)。続いて、金森先生はアガンベンの『開かれ』に言及している。すなわち、アガンベןいわく、ホモ・サピエンスは実体でも明確に規定された種でもなく、「人間的なものの再認」を生み出すためのひとつの装置なのである(213頁)。アガンベンは、この装置を〈人類学的機械〉と呼ぶ⁸⁾。金森先生はこのアガンベンの言に触れ、近代以降の承認・排除連関が、ある人間は同胞として迎え入れるのに対し、(ナチスの強制収容状におけるユダヤ人の処遇のように)「他の人間たちを動物化し、非人間化すること」も厭わなかった事実を改めて問題視する(同上)。私たちは、ここに動物に対してだけでなく、人間に対しても高い倫理意識を持って接する金

森先生の姿を認めることができる。

おわりに——「〈理性〉という砦」

私たちはこれまで、金森先生の〈境界人間論〉とその展開を駆け足で追ってきた。〈境界人間論〉はその立論構成にあたってアポリアに直面し、その後は〈動物の哲学〉のなかに回収されてしまったかのように見える。しかし、金森先生は2014年初出の論文「〈理性〉という砦」のなかで次のように述べている。「〈動物の哲学〉は間接的な人間論であることは明らかで、それと相即的に人間論は間接的な〈動物の哲学〉でもある[...]。動物をどう捉えるかは、それになんらかの解答を与える人間の自己理解を間接的に表現するものであり、それは結局、人間論の一種に収斂していく」(184頁)。つまり、金森先生によれば、〈動物の哲学〉も最終的には人間論の一部を構成するものになるのである。

そして、当論文は人間と非人間の連続性を強調する自然主義的な発想が蔓延するなかで、〈理性〉という〈反自然〉にあくまで〈人間の人間性〉を担保するという方向に向かう。このことは、〈反自然〉的な存在である私たち人間には「〈人間未満の存在〉に対してどのように振る舞うべきなのか」などの倫理的問題を考える役目があるという金森先生の主張として読めるだろう(179頁)。あるいは、これは現代社会において人間という存在がいかに凄まじい側面を持っていたとしても、理性的である限りにおいて、自然界のなかで／とともに存続することができる、という最後の——そして力強い信の表明かもしれない。

注

- 1) 東京大学大学院教育学研究科「2011(平成23)年度講義計画と内容」13頁。
- 2) 初出：「〈人文知〉の不可還元性のために」『研究室紀要』東京大学大学院教育学研究科・基礎教育学研究室、第37号、2011年、11-20頁。
- 3) 初出：「〈理性〉という砦」『フランス哲学・思想研究』日仏哲学会、第19号、2014年、65-75頁。
- 4) 連続的スペクトルに人間の〈言説編成〉によってなんらかの切斷が加わるというこの構図は、金森先生によれば、再生医学におけるES細胞やiPS細胞をめぐる議論、

- あるいはアメリカに典型的な中絶問題（受精卵・初期胚・胎児に対する処遇の問題）にも見られる。
- 5) その意味で、金森先生が人文科学と社会科学の協同は、正の価値を帯びる領域においてより容易であるとしているのは興味深い。つまり、人文科学と社会科学の協同は例えば平等という哲学的概念を社会制度にいかんにか反映させるか、という問題においてより実現しやすいとする。ただ、悪に関しても、例えば悪という概念を具現化させた個人がいかんにして犯罪を犯すかという点で犯罪社会学との協同可能性も十分に認められるはずであり、正／負で人文科学と社会科学の協同可能性を推し量るのはいささか早計かもしれない。
 - 6) そもそも、中心／境界という概念対は、先述のように二項対立的なものではなくなっている。
 - 7) その意味で、金森先生の立場は20世紀ドイツで生れた〈哲学的人間学〉(philosophische Anthropologie)に近いと思われる。例えば、シェーラーは実証的知見の蓄積によって人間と動物の連続性が高まるなかで、人間に〈精神〉という世界開放的な要素を認めることで人間の独自性をあくまで担保していた。金森先生も、シェーラーのこの姿勢を積極的に評価している（185頁）。
 - 8) ジョルジョ・アガンベン『開かれ——人間と動物』岡田温司・多賀健太郎訳、平凡社、2011年、54頁。なお、訳語は金森先生が用いたものをできるだけ尊重した。